

「好奇心」を伸ばして「人財」化

1. 「精神」の若さ

右掲は、私がよく使用する2つの公式です。上は、「若さとは肉体の若さを言うのではなく、精神の若さを指し、精神の若さを失えば、肉体が若くとも衰えてしまう」と警鐘するサミュエル・ウルマンの「青春」という詩から公式化したものです。最後の「希望」に大きな意味があります。生きる希望、すなわち「生き甲斐」が重要なのです。下は京セラの稲盛さんの著書より公式化した物で、「生き甲斐」は「成果」によって生まれると考えると「希望」＝「成果」となり

2つのルール	
・「若さ」＝「信念」x「自信」x「希望」	サミュエル・ウルマンの「青春」よりルール化
・「成果」＝「考え方」x「情熱」x「能力」	稲盛さんの「パッション」よりルール化

「若さ」＝「信念」x「自信」x「考え方」x「情熱」x「能力」

という5要素の公式になるのです。ここで一番重要な要素は「考え方」であり、「考え方」は前向き(+)にも後ろ向き(-)にもなるので、全体を(+)にも(-)にもするのです。

私自身は、本年7月に満70才になるので、ほぼ老齢期にあります。しかし、「百歳現役」と大きなアドバルーンを掲げて前向きに生きて行こうと頑張っています。しかし、前半の「信念」x「自信」は過去の蓄積から十分な物があると確信していますが、後半の「情熱」x「能力」の面で衰えを感じるようになってきているのです。何故なら、「情熱」と言ってもそれを支える体力が追いつかなくなっているのです。「能力」は体力が大きな要素ですが、その体力の衰えをカバーするのが「好奇心」に基づく積極的な行動パターンだと思っています。この「好奇心」が薄れて来たので、真ん中の「考え方」に戻って、再度、「好奇心」を増す必要があるのです。

606号で「限界効用逓減の法則」をご紹介して、繰り返す度に新しい発見が薄れて行き、どんどん「惰性」になって行き、ついには、「飽き」から「嫌気」へ変わってしまうのです。その「嫌気」から回避しようとするのが一般的なのです。回避、つまり、止めてしまう事になりやすいのです。こういう経験が増えると「惰性」が当たり前のマンネリ状態になり、ついには新しい事への「関心」が薄れ、積極的な「好奇心」がなくなってしまうのです。

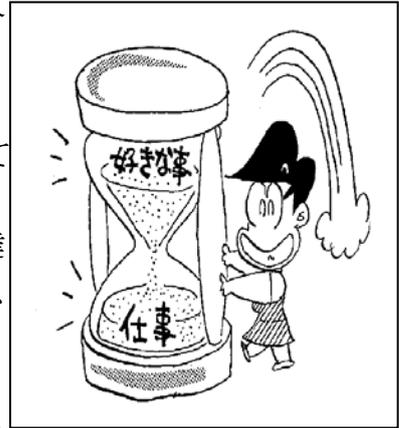
2. 「考え方」を変える

前号で「希望」≡Σ(身近な夢)と書いていますが、困った時は「看脚下」で身近な事で「達成感」を味わう事から始めています。卑近な例ですが、私は、ほぼ毎日、昼休みを利用して30分カラオケを楽しんでいます。毎日、同じ曲では機械が出す点数もすぐに上限に近づいてしまい「繰り返す」ことが「つまらない」という「飽き」になってしまうのです。従って、別な曲にチャレンジして、日々に上達する達成感を味わう事でやり続ける事が出来ているのです。実際に、初めは三波春夫さんの「俵星玄蕃」から始め、三波さんの曲にチャレンジしていたのですが、なにせ三波さんは亡くなられているので新曲が出ないのです。そこで、福田こうへいさんに始まり、三山ひろしさんと幅を拡げて、今も新曲にチャレンジしています。

このように「脱マンネリ」を図る為に「考え方」を変える必要があるのです。そのポイントが「身近」という事なのです。三波さんの歌にハマっているのです、その延長線上の若い方を選んでいくのです。三波さんは浪曲出身ですが、若い方は民謡出身の方という若干のジャンル違いがありますが、演歌の範囲内なのです。仮に、ロックやポップスなどの畑違いな分野では、自分自身が混乱してしまうと思うのです。実際に、違ったジャンルの歌もチャレンジしますが、多くは気分直しです。例えば、若い時の本多路津子さんの歌などは、クリアな感じなので気分的にスツとする味わいがあります。また、高得点の出る福田こうへいさんの「親子鷹」や「道ひとすじ」で、点数が出ない状況から脱出して自信回復することも行っています。

3. 「異次元」を切り拓く

右掲は、「好きな事」＝「仕事」というイラストです。何度もご紹介しています。砂時計のように反復する事が大切なのですが、マンネリ感が充満するとイキイキとした顔つきにならないのです。人の喜びの中に「達成感」という物がありますが、何かにチャレンジして解決できた時の達成感は大きな精神的エネルギーになります。「一生折れない自信」という言葉がありますが、このような何かを達成した自信は自分を大きく変えるパワーになるのです。その為に、よく「長所伸長法」と言いますが、ダメ出しばかりではなく、出来る事を伸ばして褒めて育てることが大切なのです。



しかし、「長所伸長法」としても同じ事の繰り返しでは人はマンネリになって「伸び」の限界に達してしまうのです。この状態から脱出するには、違った事へチャレンジする事ですが、余りに違い過ぎるとギャップが大きくて手掛かりが見つからない場合が多いのです。今までの経験の延長戦上が重要なのです。例えば、技術者の場合、技術は日進月歩なので時間の経過ですぐに時代遅れになってしまいますので全く土俵の違う技術にチャレンジするケースがあるのですが、非常に困難な場合が多いです。何故なら、日常は現状の技術なので、それを行いながら別の技術にトライアルするのは大きな精神的エネルギーが必要なのです。これを少しでも緩和する為に、現状の延長戦上に近いものを選ぶ訳です。

従って、延長線上の技術は取り付き易いのですが、異次元の物には成り難いのです。私は、余裕があるのなら「専任」にして、異次元つまり未知の技術にチャレンジさせて切り拓く根性を植え付けたいと思います。右掲は「改善・改革の4つの役割」という物で以前にもご紹介しています。「異次元」≡「トンでもない事」とすると一人では達成し難いものです。支援する人が必要であり、トコトンやり切る人も重要なのです。

改善・改革の4つの役割

1. トンでもない事を言いだす人
2. それがデキルという人
3. トコトン実践して達成する人
4. その事を横展開する人

4. 「異次元」を伸ばして「人財」化

第1項で「若さ」＝「信念」x「自信」x「考え方」x「情熱」x「能力」として、その中心は「考え方」と書きましたが、幾ら「考え方」をプラスに持っても「トンでもない事を言いだす」とかと言えば、かなり確率が低くなります。従って、周囲が囁し立てて「考え方」を変えようとしてもムダな事が多いのです。重要なのは「自発性」なのです。仮に、誰かに任命されて行うにしても、積極的になって「3つの‘不’（不足・不満・不便）」を言い出す人でないと自発性が薄いのです。積極的ボヤキと言っていますが、「あれがない、そんな状態ではダメ、こうしたら便利になる」などの意見を自分から言い出す人にこそ「人財」の可能性があるので。

確かに、そのような方は「尖がっている」という状態なので、周囲の受容力が試されます。よくある話では「そんな事を言うと自分でせなあかん」と水を注す言葉を投げつける人がいるのです。その「尖がった話」の内容によりますが、将来的に興味を湧くのは、多くの人が異質に感じる話なのです。異質であるからこそ「やり抜いた先」に光明が注し込むのです。苦勞の積重ねの先に人も化けるのです。「一皮むける」と言いますが、本当に自信に満ちた存在に育つのです。つまり、「人財」とは「切り拓く能力」を持った人だと言えます。多くは答えのない世界、やってみないと分からないのですから「能力」を信じて何事もやり切ることが大切です。